



Zoom講演会のお知らせ

日本人として今、世界平和にどう貢献できるか？
～ロシアのウクライナ侵攻から見てきたもの～

主催：津田塾大学同窓会千葉支部

講師：千田悦子さん（元国連難民高等弁務官事務所恒久的問題解決担当
官）日時：2022年6月23日（木）19：30～21：30 ※19:00開室

場所：Zoom ※参加費払込済みの方にはZoom入室用URLを6月22日に送信します。

tsudaogchiba@gmail.com からのメールを受信できる設定にしておいてください。



紛争地域で地道に支援活動を続けてこられた千田悦子さん（国大13）
がロシア寄りでもウクライナ寄りでもない立場で難民問題の実態をお話くだ
さいます。

※同窓会HPでお知らせしていたウクライナ人女性ターニャさんのビデオ出演は、
公のイベントでの発言は避難先の状況から好ましくないとのご自身の判断により
取りやめとなりました。代わりにAlex Tanasienkoさんにお話しいただく予定です。
ウクライナNPO法人「Dreams Come True Foundation」会長、日本語通訳者、教
育や心理カウンセラーなどの経験者。キーウからドイツのエルフルトを経由して
日野市の友人宅滞在。

全国の同窓生・現役学生・及びどなたの参加も
歓迎します。学生は参加費無料です。
一人でも多くの方に聴いていただきたいです。
ぜひご参加ください。

プログラム

司会：東海支部 [川澄未来子](#)

19:30 開会の挨拶：千葉支部長 渡辺節子

19:40 おはなし：同窓会長 飯野正子

19:50 講演：千田悦子

21:10 おはなし：Alex Tanasienko

私の避難紀行～ウクライナから日本まで～

21:30 閉会



[お申し込みはこちらをクリック](#)

- ・学生は参加費無料。申込書のみご送付ください。
- ・同窓生でない方は申込書の学科欄に何らかの情報を
いただけると嬉しいです。

参加費：1,000円（振込手数料はご負担願います）

振込先：郵便振替口座 記号：00110-0

番号：635026

加入者名：津田塾大学同窓会千葉支部

必要経費を除く全額を[国連UNHCR](#)に寄付いたします。

「ウクライナ難民に指定するのでなく、指定なしで世界
の難民のために寄付して頂けると幸いです。千田悦子」

4月に習志野地区から幹事を引き継ぎ、市川地区の同窓会活動を始めました。私の千葉支部とのご縁は2012年の楠山栄子さん創設の第一回総会にお招き頂いたことに始まります。熱気があり楽しい決起大会でした。大学生作成のバイリンガル日本文化世界発信Website 'Japan Thru Young Eyes'を紹介いたしました。2018年第7回総会ではSkypeでロシアのブリヤート共和国を呼び出してお話ししました。今回は3つ目のICTツールZoomで千田悦子さんの講演会にお招きいたします。

歴代幹事の献身的な活動を知るにつけ、積極的に同窓会に関わってくださる会員が少ないのは残念ですが、市川地区の活動(幹事二人で会員1483人)が今後の幹事会のあり方のヒントになればと思います。幹事の英知と努力の結晶である会報は10号まで続きましたが、人力不足もあり断腸の思いで今期11号を最後に電子化いたします。11号はアナログ(郵送)とデジタル(メール)二通りでお届けいたします。1480余名に会報を郵送すると一回の経費が20数万円、それを電子化すると0円です。ページ数や写真数が多くても経費はゼロです。経費大幅削減、紙資源の節約にもなります。デジタル会報は<津田塾大学同窓会千葉支部>を検索すると過去の全号を閲覧できます。

千葉県の一部は東京のベッドタウン、工業地帯、行楽地ですが、房総半島の大半は人口減少に悩み、単線鉄道、無人駅、無人電車も増えています。ICTを駆使して速やかに、軽やかに、広く、深く房総半島も東京も世界中もが平等に出会える場を創りたいと願っております。

支部創設の母である楠山栄子さんをはじめ、千葉、船橋、柏、習志野各地区の幹事の皆さんに実際にお会いでき、ご教示頂けたことはかけがえのない思い出です。ありがとうございます。

重要なお知らせ

会報11号は従来通り冊子を郵送すると同時にメールアドレスを登録済みの方にはデジタル会報を送信いたします。

次号から冊子は廃止して、デジタル会報のみをメールアドレス登録済みの方専用メーリングリストにお届けいたします。デジタル会報'Andante11号'が届かなかった方は

tsudaogchiba@gmail.comにご連絡ください。

メール例文

件名 ○田△子メルアド登録
本文 ○田△子 英2000年卒
住所変更した方のみ〒と住所
<変更しない方は住所記載不要>

- ・転居や本人の死亡により千葉支部を退会する場合もメールでご一報ください。
- ・千葉支部からのお知らせが不要な方、入会を希望しない方はアドレス登録の必要はありません。

遺言 タラス・シェフチェンコ 渋谷定輔・村井隆之 訳

わたしが死んだら
なつかしい ウクライナの
ひろい丘の上に
うめてくれ
かぎりない畑と ドニエプルと
けわしい岸辺が 見られるように
しずまらぬ流れが 聞けるように

ドニエプルが ウクライナから
すべての敵の血潮を
青い海へ 押し流すとき
わたしは 畑も 山も
すべてを捨てよう
神のみなもとに かけのぼり
祈りましょう だがいまは
神の ありかを知らない

わたしを埋めたら
くさを切って 立ち上がれ
暴虐な 敵の血潮と ひきかえに
ウクライナの自由を
かちとってくれ
そしてわたしを 偉大な 自由な
あたらしい家族の ひとりとして
忘れないでくれ
やさしい ことばをかけてくれ



「人生は『出会い』だ」とよく言われますが、自分の人生を振り返り、「出会い」や「ご縁」がいかに重要であったか、感謝とともに実感しています。津田塾大学に入学したのも、ある「出会い」がきっかけでした。アメリカの大学院留学も同様。そして生涯の研究テーマとなった「移民研究」と、研究と呼ぶには恐れ多いのですが「津田梅子研究」も。そして、研究のきっかけとなった「出会い」から生まれた周りの人々からの支えがなかったら、何も実を結ばなかったでしょう。

移民に関心を持ったのは津田でアメリカ研究を専攻したときでしたが、留学1年後に修士論文のテーマを選ぶ際、アドバイザーの教授が当時の主流であった政治・経済を中心とするアメリカ史ではなく「社会史」に関心を持っておられたので、日本からアメリカへの移民という私のテーマに大賛成。日本でまだ研究者の少なかった分野でしたが、私の移民研究が始まったのです。

そして津田での仕事が始まって、日本からアメリカに移住した女性のインタビューなどを続けました。1970年代、80年代は、まだ一世（移民世代）がインタビューに喜んで応じてくださいました。ことに、一世女性との交流で自分を豊かにしていただいた貴重な経験を自分の「研究」などと呼んではもったいないと思ったことなど、懐かしく思い出します。

一方の津田梅子研究は、1970年代にアメリカの研究者に頼まれて津田先生の子供教育への貢献について論文を書いたことから始まりました。ことに津田先生の次の世代を思う強いお気持ち、アメリカ人の友人たちの大きな支援などに深く感動し、細々とですが研究を続けていました。

その中で、1923年の関東大震災で「灰燼に帰した」女子英学塾の復興を助けた人々の支援について調べていたとき、私は飛び上がりました。移民研究との繋がり！ 塾復興の大きな力となった津田先生の実妹、余奈子は、日系アメリカ人と結婚し日系人コミュニティの中で復興支援の活動をしていました。そして、彼女が残したたくさんの記録から、日本の女子教育のために支援をするのは、日米関係が良好になることを願って、という理由があったことがわかったのです。当時、排日移民法と呼ばれた1924年移民法によって日米関係が悪化することを危惧した人々は、女子英学塾を支援することが日米関係を良好に保つことの一助になると考えたのです。

大切な「出会い」から始まった移民研究と津田梅子研究が結びついた！ 改めて人生の「出会い」に感謝。そして津田で学んだ「ご縁」に感謝。このようにして学んだことが次の世代に役立ちますように。



アナログからデジタルへ

英大22

楠山 栄子

第11号の千葉支部会報、ありがとうございます。津田塾大学同窓会千葉支部初代支部長を務めさせていただきました楠山栄子（流山市在住、流山市市議会議員）です。

会報がこの回を最後に、電子化されていくとのお話をお聞きしました。今回の会報が千葉支部最後のアナログの紙ベースの会報になるかと思うと、感慨深く受け止め、会報第一号を制作した頃を思い出しています。当時、60代、70代の同窓生が集まって「県域すべての同窓生と情報共有するにはどうすればいいのかしら？」という会話から始まり、「千葉県は縦に長いので、同窓会を開いても、一か所に集まることはむずかしいよね」と会食越しに喧々囂々。会報を作って、一人一人に郵送するっきゃないという結論に至りました。何もかもが一からのスタートでした。会報の名前も迷走しながら、音楽好きが多かったせいか、Andanteは？ の一声で即、決定。当時は、みんながみんなパソコンができるわけでもなく、できることを互いに引き受けて、ワードを苦使（駆使ではない！）してようやくできた会報でした。改めて、あのころは若かった…！ 60代、70代の「若い」エネルギー（笑）が成しえた結果です。今、作れと言われても…無理でしょうね。あの頃の元気、思いが、いまの1483名の千葉支部同窓生を

つないでいるのだと思うと、多少なりとも創設メンバーがお役に立っていると嬉しいです。

電子化の課題は今の日本全体の課題でもあります。ある国会議員がこんな笑話を披露されました。

「日本のデジタル技術の遅れは致命的です。アメリカとの同盟関係も、日本のICT技術の遅れがネックになっています。アメリカからは、『情報共有したいが、セキュリティが心配で日本とうかうか情報共有できない』と言われます。ところが、日本はこう答えます。『大丈夫です。日本ほどセキュリティが安全な国はありません。日本では、情報は紙に印刷してまわしていますから』」

笑い話とはいえ、去年創設されたデジタル庁初代デジタル監が早々に退任になったり、公的データ整備事業が暗礁にのりあげたりと、あまり笑えない“笑い話”になっているのは心細い限りではありますが。

千葉支部も、新支部長の渡辺節子さまのご判断により漸く会報の電子化に進むことになりました。電子化された同窓会のコミュニケーションに大いなる期待を寄せて、支部の発展を心よりお祈り申し上げます。



昨年度10ヶ月間、仕事でシンガポールに滞在した。新型コロナウイルスが猛威を奮い、観光・出張が完全停止していた時期だ。ただ、厳しい規制下でも、WiFi環境があれば大概のことは変わりなくできることも実感した。ここでは、ICT（情報通信技術）を使ったニューノーマルを3つ紹介したい。

1つめは研究・開発。入国後、ホテルに隔離された3週間、部屋から一歩も出ずに、打合せ、研究討議、学会発表など、ダイアリーには20回ほど記録が残っている。その後10ヶ月で200回近くへのぼる。ZoomやTeamsを使った会議や講演、Google WorkspaceやOneDriveなどのクラウドストレージによるファイル管理、ビジネスチャットツールSlackを使った情報共有や討議。移動時間も交通費もなしでグループワークできる時代。小さなラップトップ1台で、科学的な調査・解析から社会との協働まで。日本の職場の定例会議にも出席し続けて、10ヶ月ぶりの帰国でも浦島花子にならずに済んだ。

2つめに教育・交流。日本の大学生を対象に、シンガポールで自動運転車のバーチャル試乗、ICTビジネスの視察、現地学生との交流などを企画・実施した。重度の身体障がいのある学生も自室から海外研修に参加できたのは、オンライン開催だからである。そして、忘れられないのは、津田の大先輩・渡辺節子さん企画のオンラインイベント。10ヶ月の間に、インド、オランダ、モンゴル、アルメニア、ウクライナの各地と順に繋がった。中でもウクライナは3月初旬の開催。ハルキウのシェルターからポーランドへの避難途中の女性による命がけの実況だった。臨場感と緊張に満ちた体験で、その夜は眠れなくなった。

3つめに最期の別れ。シンガポール滞在中に父が他界した。親の葬儀でも帰国後の隔離が免除されない時期だった。父の危篤の知らせを受け、バンコク在住の息子、シンガポール在住の娘とも話し合い、3人とも帰国を断念した。葬儀では夫が家族LINEのビデオ通話を繋いでくれて、棺の中の父に会い、駆けつけた人たちと哀しみを分かち合いながら見送った。リアルな空気感に涙が溢れた。遠隔地にいても心情を共有して一区切りつけるという儀式は、残された家族にとって重要である。

シンガポールでは、Smart Nation構想のもと、政府の牽引により行政サービスのほとんどが既にデジタル化されている。マイナンバーのような国民番号をスマホにセットし、ワクチン接種もBluetooth通信で証明するしくみで、健康が守られている。また、ICT先進国のウクライナには、戦時下でもアプリやソフトをリモート開発し続ける人材がたくさんいる。イーロン・マスクがスターリンク（衛星ネット）を提供したことも話題になった。避難やファクトチェックにもICTが駆使され、ウクライナの人たちの命綱になっている。コロナや戦争などの非常事態に、各国ともICTの開発スピードと普及を加速させた。あつという間に情報後進国になってしまった日本の未来が心配である。

プロフィール

(株)豊田中央研究所にて自動車の感性品質の研究・開発に従事 後、愛知淑徳大学を経て名城大学 情報工学部教授。



Zoomを使った父の米寿のお祝い会
(左上が筆者。バンコクの息子、シンガポールの娘とともに、日本の施設にいる父を囲んで)



2021年8月16日。アフガニスタンの首都カブール在住のアブドゥルさんとのトーク。

「いよいよ首都が陥落して、大変なことになったね！どうしてる？大丈夫？？」

（意外に落ち着いた声で）「空港あたりは大混乱してるけど大丈夫。僕は逃げ出さないよ」

「でも、あなた、財務省の仕事を失ったんでしょ？」

「もう何か月も前から給料もらってなかった。前政権はひどかった、汚職まみれで。今までずっと外国から支配されてきたけど、やっとアフガニスタン人の国が作れるかも・・・」

アフガニスタン人留学生アブドゥルさんとは、2015年、私が所属するNPOの国際交流活動を通じて出会いました。キッズキャンプに参加したり、美味しいアフガン料理を作ってくれたり。彼とはアフガニスタンの情勢や平和について、よく話しました。ある日、日本の憲法9条のことを伝えると、こう言いました。

「戦争しない国って、素晴らしい！アフガニスタンは国内で銃の一つも作っていないのに、武器だらけ。全て他国から持ち込まれてるんだ。人々は戦争文化に侵されている。いつか僕の国も日本みたいに平和で安全な国になることを願っている。」

タリバンが米軍と傀儡政権を追い出したとき、彼は「これでやっと自分たちの力で国造りができる、学んだことを生かせる時が来る」と期待したのでしょうか。しかし、現実はその思いを裏切る方向に進み、活躍の場はいまだにありません。

彼が日本にいた2017年、「母国の復興に尽くしたい」という熱意に賛同した数人でEJAAD（エジャーD=イノベーションという意味のダリ語）というグループを立ち上げました。政情不安の中、家でもできることとして、刺繍製作を通じた女性の教育・就労支援をしています。伝統的に母から娘に伝えられてきたアフガン刺繍の技術を生かし、女性たちの作品を国外で販売することで経済的自立を後押しすることを目指す活動です。昨年より、カブールに小さな研修施設EJAAD CENTERを建設していますが、そのためのクラウドファンディングには津田の同窓生にも多くご協力いただきました。施設の完成を待ち切れない女性たちは、自主的に集まって母語や英語の学習を始めており、その前向きな姿に私も励まされています。一日も早くアフガニスタンの女性たちが生き生きと学び働ける日が来ますように。母国のために力を尽くしたいと願っている若者が活躍できる社会になりますように。

今年はできれば刺繍作品の展示会を関東でも開きたいと思っていますので、お力添えいただけましたら幸いです。



筆者とアブドゥルさん（2016年）

プロフィール

NPO法人国際交流の会とよなか（TIFA）事務局長。
ネパールにて孤児の支援、アフガニスタンにて女性支援。
津田塾大学同窓会阪神支部 支部長



識字教室



刺繍する女性達

はじめまして、総合政策学部総合政策学科第1期卒業生の吉野まゆのと申します。2020年度卒で、今は社会人2年目です。本年度津田塾同窓会千葉支部の役員の方と偶然面識があったことから、今回Andanteに寄稿いたしました。

1期生として入学した千駄ヶ谷キャンパスは、4年間で様々な変化がありました。学生は年々増え、図書館は学生の要望に応えながら充実していき、購買が入っていた部屋は、1期生が3年生の時に就職支援センターになり…。まさに学生と一緒に成長していくキャンパスでした。

カリキュラムとしては、3年次に4つのコースから専攻を選びます。そのため1、2年では文理問わず幅広い分野を学べる環境にあり、苦手な分野は、友人と一緒に苦戦しながら勉強したことも今となっては良い思い出です。私はヒューマン・ディベロップメントを専攻し、「個人の能力を活かしやすい仕組み・社会を作る」をテーマに勉強していました。

卒業研究プロジェクトでは、特別養子縁組を題目に選びました。コロナ禍での作成だったため、

Zoom等オンラインツールを用い、学生間でも推敲し合いながら完成させました。教授のご指導も頂きながら一般社団法人にもインタビューをお願いし、社会課題に対して実践的な学びを行うことができました。

また、キャンパスでは、梅五輪プロジェクトを始め、こどもテーブル活動、Umeson-Habitat等、様々なサークルやプロジェクトの発足がありました。全て前例がないところからのスタートでしたが、周りを巻き込みながら挑戦したり、黙々と個人でチャレンジする同級生と、これらの環境及び機会を提供してくれる教授方がいたからこそ、生まれたものだと思います。このような場所で4年間を過ごせたことは、確実に今の私が頑張れる原動力となっています。

これからもののびと学び、挑戦し、その過程を分かち合える仲間がいる総合政策学部、そして津田塾大学の発展を心よりお祈りしております。



千駄ヶ谷キャンパスにて卒業式の日に (2021年)



地元の文化財 市川編



JR市川駅、京成市川真間駅からほど近い住宅街に、かわいらしい洋館があるのをご存じでしょうか。大正期に東京株取引所の仲買人であった渡辺善十郎氏により、日本家屋の母屋に隣接するゲストハウスとして昭和2年に建てられた建物で、1999年に県内9番目、市川市内最初の国登録有形文化財に指定されました。善十郎氏の孫、俊司氏は小規模な音楽ホールを併設し「いちかわ西洋館倶楽部」として1995年にオープン。洋館内を通してホールに入る造りのため、訪れた人々は良質な音楽とともに大正ロマンの雰囲気を楽しむことができます。



訪れたのは母の日を前にしたある日。市川真間が「市川ママ駅」に…
(国大20 成田百合子)

編集後記

千田悦子さんの講演に合わせて急遽会報を作りました。ご寄稿くださった方々に心からお礼申し上げます。タラス・シェフチェンコの「遺言」はウクライナでは老若男女誰もが暗誦します。大国の狭間にあり広大で肥沃な土地を奪われ続けた人々にとって、詩人は救世主、英雄でした。今も戦地でシェフチェンコの詩を唱えているのでしょうか。最後に会報を急ピッチで創り上げた相方に感謝します。SW

青天の霹靂で引き受けることになった千葉支部幹事。これまで一度も支部の活動に参加したことがなかった身には、何もかもが新鮮です。世代を超えて同窓生がつながる一助になれば幸いです。これから2年間、よろしくお願い致します。YN